

母親の自尊感情と養育態度

—子どもの自尊感情を育むために—

加藤 悠*・中島美那子**

キーワード：自尊感情，養育態度，母親の就業，ひとり親家庭

I. 問題と目的

子どもたちの心の問題が指摘されるようになって久しい。いじめ，自殺，少年犯罪など，子どもが引き起こす現象が社会問題化するなか，現代の子どもたちは「感情のコントロールが困難」「積極性に欠ける」「活力が無い」といった傾向にあるとも言われている。今，子どもたちに何が起きているのだろうか。古荘（2009）は，子どもの心の問題の背景に自尊感情（セルフ・エスティーム）の低下があると指摘する。

自尊感情とは何であろうか。遠藤（1999）によれば，「自己に対する評価感情で，自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」（pp.343-344）と説明される。「自尊感情」という言葉が表す通り，「自分を尊い存在であるとする感情」を意味するのである。

セルフ・エスティームの訳語には，「自尊感情」の他に「自尊心」「自負心」「自己評価」「自己肯定感」などがある。心理学においては「自尊感情」が一般的に使用されてきたが，近年では「自己肯定感」と訳す場合も多い。その理由について，深谷（2010）は「自尊感情」の「自尊（自分を尊敬する）」という言葉が，日本文化に受け入れられなかったことを指摘している。田中（1999）が示すように，日本人にとって「尊敬」という言葉は，自分に対して使うよりも，他者に対して使う方がなじみ深いのである。そこには，「自尊感情」を「うぬぼれ」のような否定的な意味合いに感じ，謙遜してしまう日本の国民性がある。しかし，中間（2007）は「自らを尊重すること，尊厳を感じることでそれ自体は，決して否定的なことではない」（p.12）と述べている。つまり，自分の尊厳を意識・主張するあまりに，他者の尊重を犠牲にしてしまうことが問題なのであり，それは本来の「自尊感情」ではなく，排他的な自己愛の「ナルシズム」であると言える。このような現状を踏まえたうえで，ここでは，「ナルシズム」と区別した意味での「自尊感情」を，セルフ・エスティームの訳語として用いることにする。

前述したように，自尊感情とは「自分を尊い存在であるとする感情」であり，この捉え方についてはほぼ共有されていると言える。しかし，自尊感情尺度を作成したRosenberg（1965）は，自尊感情には「とてもよい（very good）」と「これでよい（good enough）」という異なる二つの側面があるとしており，どちらをもって自尊感情とするかについてはさまざまな主張がある。「とてもよい」の自尊感情とは，他者を判断の基準にすることによ

*日本労働者協同組合連合会センター事業団 特定非営利活動法人ワーカーズコープ

**茨城キリスト教大学

る「自信」や「有能感」を意味するものであり、眞榮城（2010）がこの立場にあたる。それに対し「これでよい」の自尊感情とは、ありのままの自分を受け入れる「自己受容」を意味するものであり、汐見（1997）や佐々木（1998）がこの立場にあたる。前者は「～ができる自分はとてもよい」という、自分のある部分的な能力や特性に対する評価感情であり、後者は「～ができない自分でもこれでよい」という、すべての要素を含めた包括的な自分に対する評価感情であると言える。

また、両者が組み合って自尊感情を構成しているという見解もある。近藤（2007）は、「とてもよい」の自尊感情を「社会的自尊感情」、「これでよい」の自尊感情を「基本的自尊感情」と呼び、基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っているというのが、自尊感情の構造であるとしている。つまり、土台となる基本的自尊感情がしっかりと育まれていなければ、社会的自尊感情が肥大化し、不安定な自尊感情になってしまうのである。それは、今日にみる「よい子」の問題（周囲から見て問題のない「よい子」であったはずの子が、突然キレたり不登校になったりすること）と深く関連していると言える。競争や努力によって育まれる社会的自尊感情は、優れた能力や特性をもっている自分であるから「とてもよい」と思えるのであり、その条件を失えば簡単に崩れてしまう。そして、社会的自尊感情が崩れたとき、その心を支えるのは、たとえ優れた能力や特性がなくても「これでよい」と思える基本的自尊感情なのである。しかし、基本的自尊感情が欠落している場合、能力や特性は自分の一部であるにもかかわらず、自分の存在そのものに価値を見いだせなくなってしまう。「よい子」の問題の背景には、そういった不安定な自尊感情があるのである。

「よい子」の問題を考えるうえでも、自尊感情を構成する要素として「基本的自尊感情」がいかに重要であるかということが理解できる。しかし、近藤（2007）の言う「基本的自尊感情」に相当する感情は、現代の子どもたち全体として低下傾向にある。つまり、ありのままの自分を「これでよい」と受容できず、自分に対して否定的な感情を抱いている子どもが多いのである。そして、そういった自己否定の心が、現代の子どもたちの不安定な情緒や自信の無さ、生きる力の低下として表れていると言える。このような現状から、ここでは、近藤（2007）の見解を採用するとともに、問題としている「自尊感情の低下」とは、「基本的自尊感情（「これでよい」の自尊感情）の低下」を意味するものであると捉えることにする。

では、なぜ現代の子どもたちの自尊感情は低下しているのだろうか。ユニセフ・イノチェンティ研究所（2007）による子どもの幸福度調査では、日本の子どもの幸福度が最低レベルであることが明らかとなった。特に注目すべき点は、主観的な幸福度を問う項目の中で「孤独を感じる」と答えた子どもの割合が、日本は他国に比べ突出して高いということである。この結果は、日本の子どもたちが、自分の身を置いている場に対し、安心できる「居場所感」や「幸福感」を持ちにくい状態にあることを示していると言える（園田、2007）。そして、こういった子どもの「心の居場所」の無さと、自尊感情の低下には深い関連があると、園田（2004）は指摘する。なぜなら自尊感情とは、自分の存在に対する揺るぎない安心感を得ることによって育まれる感情であるからである。言い換えれば、自尊感情を育むためには、ありのままの自分を「これでよい」と実感することのできる環境が必要不可欠なのである。つまり、現代の子どもたちの育つ環境が、そういった「心の居場

所」になり得ていないということが、自尊感情の低下につながっていると考えられるのである。

では、基本的自尊感情が育つ環境とはどのようなものなのだろうか。菅 (2010) が「親が子どもに与えることのできる最高の贈り物は、無条件の肯定的な自己像を育むことである」(p.57) と述べているように、子どもがありのままの自分を「これでよい」とする基本的自尊感情を育むためには、ありのままの子どもを「これでよい」と受け入れる親の存在が必要であると言える。そして佐々木 (1998) は、幼児期の子どもにとって母親は、生きていく拠りどころとしての基本的な存在であると述べる。もちろん、母親だけが幼児期の子どもの絶対的存在となり得るわけではないが、現在の日本においては、いまだほとんどの幼児が日々の多くを母親と過ごすことから、「母親が拠りどころ」となるのも事実であり、したがって母親から与えられる影響は大きい。現に、小・中学生の子どもでも、親の養育が子どもの自尊感情に影響を及ぼしている (小玉, 2010)。

さらには、子どもは親の自尊感情のレベルを模倣するという見解もある (友利ら, 2004)。渡邊と平石 (2007) は中学生であっても、母親の自尊感情と子どものそれが有意な正の相関関係を示すことを見出した。

このように、家庭環境、なかでも母親の養育態度・養育観は、子どもの自尊感情を育む重要な役割を担っていると言える。くわえて、母親の自尊感情の程度が子どもの自尊感情の程度を予測する。

そこで本研究では、幼児期の子どもを育てている母親の自尊感情について調査したうえで、それぞれの母親がどのような養育態度・養育観で子どもと接しているのかについて検討することとした。

Ⅱ 調査方法

調査対象者

保育所、幼稚園へ通う子ども (3歳から就学前まで) の母親を調査対象者とした。母親の平均年齢は、35.52歳 (最年長48歳, 最年少22歳) であった。

手続きおよび調査時期

2010年12月に質問紙を配布し、2011年1月中旬に回収をした。配布は保育所・幼稚園に依頼し、回収は返信用封筒を用いて郵送、または担任を介して行った。配布数154、回収数は90であり、回収率は58.4%であった。ただし、そのうちの9名は子どもが対象年齢外 (3歳未満) であったため、有効回答数81について分析した。

調査内容

無記名の質問紙調査を行った。質問紙は、(1) 養育態度 (2) 母親自身の自尊感情 (3) 自由記述から成る。

(1) 養育態度

養育態度は、森下・木村 (2004) の作成した20項目の他、新たに、子どもの自尊感情を育む養育態度と思われる10項目を加えた計30項目を使用した。また、森下・木村 (2004)

の養育態度尺度の項目の表現を一部修正して用いた。質問項目の作成・修正に際し、あらかじめ10名の母親に予備調査を実施し、そこで出された意見をもとに、質問内容を再構成した。回答は、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法を採用した。

(2) 自尊感情

母親自身の自尊感情を尋ねる尺度は、Rosenberg (1965) の尺度を日本語訳したものの中から、山本ら (1982) による尺度を使用した。回答は、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法を採用した。

(3) 自由記述

「どのような時に楽しさや幸せを感じるか」について、具体的な回答を求めた。

(4) フェイスシート

年齢、最終学歴、職業、同居家族の構成員、子どもの性別と年齢について求めた。

Ⅲ 結 果

養育態度尺度30項目、自尊感情尺度10項目それぞれについてCronbachの信頼性係数を求めたところ、それぞれ α 係数.714と.815であり、ほぼ内的整合性が認められたと言える。

被験者の特徴

表1から表3に、被験者の特徴を示す。

表1 子どもの人数

子ども数	度数	(%)
一人	21	(25.9)
二人	43	(53.1)
三人	14	(17.3)
四人以上	3	(3.7)
合 計	81	(100.0)

表2 家族の形態

家族形態	度数	(%)
核家族	59	(72.8)
三世代同居 (母方)	11	(13.6)
三世代同居 (父方)	10	(12.4)
三世代同居 (父母両家の母)	1	(1.2)
合 計	81	(100.0)

表3 就業状況

就業状況	度数	(%)
非就労 (専業主婦)	29	(35.8)
正社員, フルタイム	30	(37.0)
パートタイム	20	(24.7)
その他 (自営, 他)	2	(2.5)
合 計	81	(100.0)

自尊感情の高さによる養育態度の差

はじめに被験者を自尊感情得点の平均値2.32を基準に、自尊感情高群 (n=49) と自尊感情低群 (n=31) の2群に分けた。そして自尊感情高群・低群による養育態度の差を検討するため、養育態度項目におけるt検定を行った。その結果、5項目において有意差が認められた(表4)。

「子どもと一緒に外出するのが好きだ」「子どもと一緒に物事をするのはあまり好きではない」という項目に対し、それぞれ0.5%水準で有意差が見出された[t(78)=2.35, p<.05][t(77)=2.08, p<.05]。つまり、自尊感情が高い母親ほど、子どもとともに居ることを好ましく考えていると言える。そして「子どものことに気を配っている」と自覚しているのも自尊感情の高い母親であった[t(78)=2.18, p<.05]。さらには、自尊感情の低い母親よりも高い母親の方が「子どもの考えや意見を聞く」と自覚している[t(78)=2.56, p<.05]。一方、子どもに対し厳しいしつけが好ましいと考えているのは、自尊感情低群の母親の方であった[t(78)=3.28, p<.01]。

就労状況による自尊感情の比較

次に、被験者の就労状況(非就労, パートタイム就労, フルタイム就労)による自尊感情の差について検討するため、一要因の分散分析を行った(表5)。

全体では、F値2.70(自由度2,75)が10%水準で有意傾向があることが見出された。また、非就労群とフルタイムの就労群との間で有意傾向があり、自尊感情は専業主婦の母親よりも、フルタイムで働く母親の方が高い傾向にあることが示唆された。

表4 自尊感情高群・低群における養育態度の差

項 目	自尊感情 高群・低群	度数	平均値	SD	t
子どもと一緒に外出するのが好きだ	高群	49	1.41	0.54	.021**
	低群	31	1.74	0.73	
子どもと一緒に物事をするのは あまり好きではない (R)	高群	48	1.63	0.61	.041**
	低群	31	2.00	1.00	
子どものことに十分気を配っている	高群	49	1.82	0.49	.032**
	低群	31	2.06	0.51	
子どもの考えや意見を聞く方だ	高群	49	1.80	0.61	.010**
	低群	31	2.16	0.58	
厳しくしつけた方が良い (R)	高群	49	2.37	0.64	.002***
	低群	31	2.87	0.72	

** p < .05

*** p < .01

(R) は逆転項目

表5 就業状況別自尊感情の平均値と分散分析

就労状況	度数	自尊感情平均値	SD	F値	多重比較
①非就労群	29	2.45	.47	2.70 [†]	①<③
②パートタイム群	20	2.33	.46		
③フルタイム群	29	2.18	.38		

† p < .10

表6 配偶者の有無における自尊感情

	度数	自尊感情平均値	SD	t
配偶者あり	73	2.27	.41	.001***
配偶者なし	7	2.84	.47	

*** p < .01

配偶者の有無と自尊感情

配偶者の有無による自尊感情の差を検討した(表6)。

度数の差があるため、結果の断定については慎重を記すが、配偶者とともに生活を営む母親と配偶者のいない母親とでは、1%水準で有意差が認められた。つまり、配偶者のいない母親の方が、自尊感情が低いという結果となった。

就労状況による養育態度の比較

就労状況(非就労, パートタイム就労, フルタイム就労)による養育態度の差について検討するため、一要因の分散分析を行ったところ、3項目において有意差が示された(表7)。

まず、「子どもと一緒に外出するのが好きだ」という質問に対し、全体では、F値5.26(自由度2,76)が0.01%水準で有意差があることが見出された。また、非就労群とフルタイムの就労群との間で0.01%水準の有意差があり、専業主婦の母親よりも、フルタイムで働く母親の方が子どもと外出することを好ましく考えていることがわかった。

「子どもには習い事で頑張ってもらいたいことがある」には、F値3.97(自由度2,76)が0.5%水準で有意差があり、非就労群とフルタイム就労群との間で0.5%水準の有意差があることが見出された。つまり、フルタイムで働く母親より専業主婦の母親の方が子どもの習い事に対する期待が大きいと言える。

そして、「子どものためにとっても苦労している」という項目には、F値4.50(自由度2,75)が0.5%水準で有意であった。加えて、非就労群とフルタイム就労群との間で0.5%水準の有意差があることが見出され、フルタイムで働く母親よりも専業主婦の母親の方が、子育てへの苦労感が大きいことが認められた。

子ども数と自尊感情、三世代同居の有無と自尊感情、母親の年齢と自尊感情

表7 就労状況別養育態度の分散分析

項目	就労状況	度数	平均値	SD	F値	多重比較
子どもと一緒に 外出するのが好きだ	①非就労群	29	1.83	0.66	5.26***	①<③
	②パートタイム群	20	1.44	0.60		
	③フルタイム群	30	1.35	0.55		
子どもには習い事で頑張っ てほしいことがある (R)	①非就労群	29	2.93	0.90	3.97**	①<③
	②パートタイム群	20	2.55	0.83		
	③フルタイム群	30	2.23	1.04		
子どものために とても苦労している (R)	①非就労群	28	2.46	0.74	4.50**	①<③
	②パートタイム群	20	2.20	0.77		
	③フルタイム群	30	1.93	0.52		

** p < .05 *** p < .01 (R) は逆転項目

その他、子どもの人数、三世代同居の有無、母親の年齢における自尊感情の差をそれぞれ分析したが、いずれも有意差は認められなかった。

自由記述について

「どのような時に楽しさや幸せを感じるか」についての記述を求めた結果を表8に示す。有効回答数は75人であった。

回答は、「家族とともにすること」「子どもとともにすること」「自分一人の時間」のいずれかに分類することができた。回答数は、「子ども」が46 (41.1%) と最も多く、次いで「家族」に関する内容が40 (35.7%)、「自分」が26 (23.2%) であった (複数回答で回答総数112)。

半数近くの母親が、子どもが楽しさや幸せを感じる事が直接、母親にとっての楽しさや幸せにつながっている。他にも、「子どもに必要とされる時」「子どもに好きと言われる時」など、子どもからの能動的な働きかけに幸福感を感じるという回答もあった。また多くの場合、家族で過ごす時間そのものや、家族との会話や食事といった日常生活における何気ない場面で、楽しさや幸せを感じている。

さいごに、家族とは離れ、自分だけの時間を楽しみや幸福を感じる母親がおよそ4分の1いることについて触れたい。主な回答は、「自分の時間をもてた時」「友人と過ごしている時」などであった。乳幼児を育てている母親にとって、自分の時間を十分に取る事自体が難しい状況にあることの表れではあるが、家族や子どもと過ごす中での幸福感に比べ、回答数は最も少なかった。「自分一人の時間」に関する記述をする者は、同時に「家族」や「子ども」に関する記述をする者が多い中で、「自分一人の時間」だけを記入する者が9名 (26名中) いた。就労状況を見ると、9名のうちフルタイムで働く母親は1名のみで、4名はパートタイム就労の母親、残りの4名が専業主婦の母親であった。

表8 楽しさや幸せを感じる時

分類	記入内容	度数	合計
子ども	子どもの笑顔・寝顔を見る時	18	
	子どもの成長を感じる時	11	
	子どもと遊んでいる時	8	
	子どもに必要とされる時	2	
	子どもに好きと言われる時	2	
	夫が子どもと遊んでいる時	2	
	子どもに抱きしめられる時	2	
	子どもがいい子でいる時	1	46
家族	家族で笑い合っている時	14	
	家族そろってられる時	10	
	家族で外出する時	9	
	家族で食事をしている時	6	
	家族旅行	1	40
自分	自分の時間がもてた	7	
	友人と過ごす時間	6	
	趣味を楽しんでいる	4	
	おいしいものを食べている時	4	
	睡眠時間が取れる時	2	
	ペットといる時	1	
	好きなものを買う時	1	
	仕事をしている時	1	26

IV 考察

母親の自尊感情の高さと養育態度

自尊感情の高い母親は、子どもとともにいることや活動することに対して積極的であり、自尊感情の低い者は、子どもとかわるることに対してあまり好意的でないことが認められた。根本（2007）が、子どもは自分といることを喜ぶ親を見て、自分の存在価値を実感すると述べるように、親自身が子育てを楽しむこと、子どもとの時間を大切に思うことは、子どもの自尊感情を育むことにつながる。さらに、自尊感情の高い母親は、子どもに気を配ることを意識し、子どもの考えや意見を聞くようにしていることが見出された。金澤（2007）が「自尊感情を育てるために親がすべきことは、どんなに小さくても子どもを独立した一人の人間として扱うことである」（p.73）と述べるように、幼児だからといって

ないがしろにせず、子どもの主張を聞き、尊重する態度は、子どもの自尊感情を育むことにつながる。そして、自尊感情の低い母親の方が子どもは厳しくしつけた方が良く考えていた。しかし、佐々木（2000）によれば、しつけとは子ども自身が自分で納得して行動できるようにしてあげることであり、それは厳しく強制すればできるようになるものではないとしている。つまり、なぜそれをしてはいけないのか、なぜ我慢しなくてはいけないのかということ、穏やかな言葉でくり返し伝え、子どもが理解できるまで待つてあげることこそが本来のしつけであり、幼児期の子育てに厳しさは必要ないのである。むしろ、厳しく育てられた子どもの行動の動機には、叱られたくないからやらないという部分が相対的に強くなり、その子の本当の感情を表す動機が薄れてしまうと、汐見（1997）は指摘している。それは、子どもが自分のありのままの感情を素直に表現できなくなるということであり、ありのままの自分を「これでよい」とする自尊感情を低下させてしまうことは明らかである。

母親の就労状況における自尊感情、養育態度

子どもに習い事をさせる時間的余裕があるための結果かもしれないが、非就労の母親はフルタイムの母親よりも、子どもに習い事で頑張ってもらいたいことのある者が多かった。親が子どもに無限の可能性を感じ、期待をかけることは自然な感情であると言える（菅，2010）。しかし同時に、菅（2010）が「期待をかけるあまり、子どもの適性や力量に配慮することなく、自分の課した目標にまで到達せよと強いるのは、心理的虐待に相当する」（pp.58-59）と述べるように、過剰な期待をかける養育態度は、子どもの自尊感情を低下させることにつながる。また、非就労の母は就労群に比べて、子どもと外出することを好意的に捉えておらず、同時に子どもに苦勞をかけられていると感じている者も多かった。

そして、自尊感情に視点を移せば、子どもと過ごす時間の長い専業主婦に自尊感情の低い者が目立ち、子どもと過ごす時間の短いフルタイム就労の母親に自尊感情の高い者が多い傾向がみられた。すでに十数年前から専業主婦層の閉塞感や負担感は注目され、就労している母親の自尊感情の高さも認められている（厚生省，1998；小林，1997など）。それにもかかわらず、状況は何ら変化していない。

鈴木（2001）が、母親自身の精神状態や母親が自分の役割に満足しているかどうかは、子どもとの関係に大きく影響するとしているように、子どもと過ごす時間の長さではなく、たとえ短くても質の高いかかわりが、子どもの自尊感情の形成において大切であると言える。

配偶者の有無と自尊感情

配偶者のある母親に比べ、配偶者のいない、いわゆるひとり親の母親の自尊感情の低さが認められた。

ひとり親家庭は両親家庭に比べ、経済的負担が大きく時間的にも精神的にも余裕の無い状況にあるとされている（阿部，2008；湯澤，2009；厚生労働省，2007など）。母親の気持ちに余裕が無く不安定な状態であることが、自らの自尊感情の低下に影響し、ひいては子どもの自尊感情へも影響する。現に日本では他国に比べ、長時間働いても経済的困窮状

態にあるひとり親の母親が多い(阿部, 2008)ことから, 恒常的な心身両面での余裕のない状況は, 個人に帰する問題ではなく, 社会構造上の問題であると言える。

子どもの自尊感情の育成を阻むもの

以上, 自尊感情と養育態度の関係から, 自尊感情の高い親ほど好ましい養育態度であることが示唆された。親の自尊感情の高さはその養育態度に関連し, さらには子どもの自尊感情に影響を与える。子どもが適切な自尊感情を育てていくのは, 幼児期からの積み重ねによるものであることから, 子どもばかりではなくその時点で主にかかわる者の自尊感情に注目し, 同様に育てていかなければならない。

本研究では, 専業主婦やひとり親家庭の母親の自尊感情が低い傾向にあることが明らかとなった。金澤(2007)は子どもが適切な自尊感情を育てることを妨げてしまう親は, その背景に自分自身の不安感があると指摘するように, 専業主婦やひとり親家庭であること自体が要因なのではなく, そのために母親が孤立したり気持ちにゆとりを持てなくなったりしてしまうことに問題があると言える。そして, それは専業主婦やひとり親家庭の親に限らず, 全ての親に共通して言える問題である。なぜなら, 現在の日本では, 社会の雰囲気の中に余裕がなくなっている分, 子どもの存在をありのままに受け入れる余地が減ってしまっているからである(古荘, 2009)。現代の子どもたちの自尊感情の低下は, 家庭内の, ひいては母親個人の努力だけでは解決し難い, 社会全体の問題であると言える。

しかし, 自尊感情が育ちにくい社会の中であっても, 身近なおとなはできる限り子どもの自尊感情を育てていかなければならないことも事実である。そして, そのためには母親だけでなく, 多くの人が子育てにかかわるといことが何よりも大切であると言える(鈴木, 2001)。なぜなら, 未だ日本では, 子育ては家庭で母親が担うものというイメージが根強く, 子育てが閉塞感の強い状況の中で行われやすいからである。自由記述の回答で, 専業主婦やパートタイムで働く母親ほど「自分の時間をもてた時」に幸せや楽しさを感じると答えた割合が多かったように, 母親に子育ての負担が重くのしかかればかかるほど, 子どもと共にする時間に幸福を感じられなくなる。子どもの自尊感情を育むためには, まず母親が自らの自尊感情を育てることが優先されるべきであり, そのためには私たち一人ひとりの理解と協力が必要である。

引用文献

- 阿部 彩. (2008). 子どもの貧困—日本の不平等を考える. 岩波新書.
 遠藤由美. (1999). 自尊感情. 中島義明・他(編). 心理学辞典, 有斐閣, 343—344.
 深谷和子. (2010). 編集後記. 児童心理3月号. 金子書房.
 古荘純一. (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告. 光文社新書.
 菅佐和子. (2010). 親が注ぐ無条件の愛と自己肯定感. 児童心理3月号. 金子書房.
 金澤広明. (2007). 子どもの自尊感情を育む親・教師. 児童心理7月号. 金子書房, 72—77.
 小林美登. (1997). 育児中の母親の自己肯定感と育児負担感について. 母子研究, 18, 32—41.
 小玉陽士. (2010). 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響—子どもの認知に焦点を当てて—. 日本教育心理学会総会発表論文集, 52, 321.

- 近藤 卓. (2007). 「生きる力」を支える自尊感情. 児童心理 7月号. 金子書房. 44-47.
- 厚生労働省. (2007). 平成18年度全国母子世帯等調査結果.
- 厚生省 (監修). (1998). 平成10年版厚生白書. 大蔵省印刷局.
- 眞榮城和美. (2010). セルフエスティームを高める要因—これまでの研究の中から. 児童心理 3月号. 金子書房.
- 森下正康・木村あゆみ. (2004). 母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要. 14.
- 中間玲子. (2007). 自尊感情の心理学. 児童心理 7月号. 金子書房. 12-13.
- 根本橋夫. (2007). なぜ自信が持てないのか—自己価値観の心理学. PHP新書.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 佐々木正美. (1998). 子どもへのまなざし. 福音館書店.
- 佐々木正美. (2000). 「お母さんがすき、自分がすき」といえる子に—信頼されて子どもは育つ. 企画室.
- 汐見稔幸. (1997). ほめない子育て—自分が好きといえる子に. 栄光.
- 園田雅春. (2004). 子どもの自尊感情形成過程における状況性の考察. 甲子園短期大学紀要. 23.
- 園田雅代. (2007). 今の子どもたちは自分に誇りを持っているか—国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情. 児童心理 7月号. 金子書房. 2-11.
- 鈴木佐喜子. (2001). 3歳児神話を検証する 2—育児の現場から. 日本赤ちゃん学会.
- 田中道弘. (1999). Rosenbergの自尊心尺度に対する回答理由の研究.
- UNICEFイノチェンティ研究所. (2007). 先進国における子どもの幸せ.
- 渡邊賢二・平石賢二. (2007). 中学生の母親の養育スキル尺度の作成—学年別による自尊感情との関連—. 家族心理学研究. 21 (2). 106-117.
- 友利久子・嘉数朝子・大城一子・仲程えり子・金武朝成・仲村美鈴. (2004). 子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル—米国の育児書の紹介. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要. 6. 111-133.
- 湯澤直美. (2009). ひとり親世帯の貧困. 子どもの貧困白書編集委員会 (編). 子どもの貧困白書. 明石書店.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究. 30. 64-48.

The effect of self-esteem on parenting attitudes of mothers with infants —For developing self-esteem in children—

Haruka Kato, Minako Nakajima

This study attempted to illuminate the relationship to levels of self-esteem and parenting attitudes in mothers with infants. Mothers (N=81) completed the self-esteem scale (10 items) and the parenting attitudes scale (30 items). As a part of the results, the higher group of self-esteem indicated the higher level of parenting attitudes. Other results were that homemaker mothers tended toward lower degree of self-esteem and also indicated lower level of parenting attitudes in comparison with mothers working full-time. Single mothers have lower degree of self-esteem than married mothers with a significant difference.

It is well known that children's self-esteem is influenced by mothers' self-esteem. For the purpose of improving mothers' self-esteem and children's self-esteem as well, it is necessary for mothers (especially for homemaker mothers and single mothers) that the burden of childcare is lightened.